



カガミクリスタル株式会社

代表取締役社長 望月 英俊 氏

■企業概要

本社：茨城県龍ヶ崎市向陽台4丁目5番地
銀座ショップ：東京都中央区銀座6丁目2番1号
Daiwa銀座ビル1F

営業所：東京

創業：1934年6月

資本金：9,800万円

従業員：78名

事業内容：クリスタルガラスの食器、花瓶・オーナメント・時計等インテリア商品の製造および販売

龍ヶ崎市に本社を置くカガミクリスタル株式会社は、今年で創立82年を迎える日本のクリスタルガラスの先駆者です。

創業者である各務鑛三は、昭和2年にドイツへ渡り、クリスタルガラス製法やグラヴィール彫刻を学び、透明な美しさやその素晴らしさを初めて日本に紹介しました。

その後、日本初のクリスタルガラス専門工場を設立し、現在は、日本で唯一クリスタルガラスを一貫して大量生産できる企業となっています。

同社のクリスタルガラス食器は、皇室御用品として、また、世界各国に点在する250以上の日本大使館や領事館に納められ、国内外から高い評価を得ています。

望月社長は、「存在感のある会社」を目指し、絶対的な高い品質を維持する商品を創り続け、「茨城県にカガミクリスタルあり」といわれる会社を目指しています。

(インタビュー日：2016年4月1日)

〔聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一〕

社長様のご経歴や御社の事業に携わるようになったきっかけについてお聞かせください。

約30年の営業実績と豊富な海外経験

私は、1959年に長野県松本市で生まれました。松本はとても寒い地域だったため、暖かい場所で暮らしたいと思い、東京に本社を置く日本板硝子(株)に就職しました。

同社において、私は営業職一筋でした。三重県にある工場の営業部長となった時は、1年のうち

約4ヶ月はホテルに、約2ヶ月は海外に滞在する生活が6年間続いたこともありました。

2010年には、同社の関連会社で中国の江蘇省にある蘇州板硝子電子有限公司へ出向しました。ここでは全ての事務を総括する総経理として2,160名の先頭に立ち、事業を進めました。

そして、2年半後に日本へ帰国し、2013年日本板硝子の子会社であるカガミクリスタル(株)の社長に就任しました。

日本におけるクリスタルガラスの歴史や魅力についてお聞かせください。

日本のクリスタルガラスの歴史を創る

当社は、今年で創立82年を迎えます。創業者である各務鑛三はドイツへ渡ってクリスタルガラス製法やグラヴィール彫刻を学び、透明な美しさやその素晴らしさを日本に初めて紹介した技術者です。

南満州鉄道(株)の子会社である南満硝子(株)に所属していた各務は、1927年、近代ガラス工芸が確立していない時代に熱望していたドイツ留学を果たしました。

各務が留学中に師ウィルヘルム・フォン・アイフ教授から絶賛された卒業制作の飾皿(右図)は、まさに日本のクリスタルガラスの原点とも言える至宝です。



飾皿「折り」1929年 各務鑛三作
〔各務鑛三記念館〕蔵

【クリスタルガラスを芸術作品に昇華

帰国した各務は、1930年東京市滝野川（現 北区）に「各務クリスタル工芸硝子研究所」を設立、1934年には東京市蒲田（現 大田区）に日本初のクリスタルガラス専門の一貫生産工場である「各務クリスタル製作所」を設立し、クリスタルガラス製造を開始しました。



【鉢】 1959年 各務鑛三作
(クリスタルガラスで初めて日本芸術院賞を受賞)

その後、各務はドイツ留学で学んだ技術と努力により、クリスタルガラスが持つ特性を最大限に引き出し、芸術作品にまで昇華させました。

それは1937年のパリ万国博覧会で銀賞受賞に始まり、ニューヨーク万国博覧会で名誉賞受賞、ブラッセル万国博覧会でグランプリを受賞するなど、多くの栄誉に輝いたことが物語っています。

このように、各務の人生と当社が歩んできた道は日本におけるクリスタルガラスの歴史そのものであるといっても過言ではありません。

【いつまでも色あせない輝き

クリスタルガラスとは、「水晶のように透明なガラス」という意味です。

私が感じるガラスの魅力は、「永遠に色あせることのない美しい輝き」です。

精選された高純度の原料、洗練されたデザイン、熟達した技術により創り出された最高級クリスタルガラスは、高い透明度と美しい輝き、そして澄んだ音色が響きます。



【壺中天】 1967年
「各務鑛三記念館」蔵

御社の主力商品や皇室御用品として使用されるようになった経緯についてお聞かせください。

【「くらしに夢と輝きを」

当社は、創業時からクリスタルガラスの食器や花瓶、オーナメント、時計などを製造してきました。時代が移るにつれ同業社は次々と廃業し、現在、日本でクリスタルガラスを一貫大量生産できる会社は当社のみとなっています。

私は「美しい食器は生活を豊かにする」と考えています。そこで、当社のHPでは「カガミスタイル」と題し、クリスタルガラスをくらしの中に取り入れることで得られる豊かなライフスタイルを提案し続けています。

また、ショップのディスプレイは社員自ら季節やテーマに合うようデザインし、お客様の心を惹く空間づくりを目指しています。

これらの取り組みを通していつまでもお客様にご満足いただける商品を展開し、「くらしに夢と輝きを」お届けしてまいります。



春をイメージしたディスプレイ(手前)、デザイナーの石塚氏が担当(本社ショップ内)

【最高級の皇室御用品

当社のクリスタルガラスは、1943年に昭宮内親王ご降嫁の際にご調度品を拝命いたしました。それ以降皇室の御用を賜わっております。1968年に宮内庁新宮殿、1974年には迎賓館並びに和風別館へ公式の場で使用される食器を納入しました。

また、世界各国に点在する250以上の日本大使館や領事館で当社の食器が使われており、日本における最高級のクリスタルガラスとして高い評価をいただいております。

さらに、世界各国の王室・大統領など多くの要人を国賓としておもてなしする歓迎晩餐会や国際会議の場においても、日本を代表する食器としてご使用いただいております。

クリスタルガラスの製造工程や各職人の想いについてお聞かせください。

溶けたガラスに息を吹き込む

当社では、創業時から培われてきた手吹き、ハンドカット、グラヴィール彫刻の熟達した技術をさらに高め続けています。

全ての基盤となる成形工程は、1,000℃に熱したガラスを吹き竿で巻き取る作業から始まります。ガラスの重量調整は、職人の経験と感覚が頼りです。

30年間、ガラス成形に携わる武井は、「受け継がれてきた道具や使用法には全て意味があります。それを重んじて正しく使いこなすことが良いものを作る近道です。」と話しています。



ガラス成形作業の様子（武井氏は左）

美しさを引き立たせるカット技術

成形されたガラスは、表面を各種グラインダーで削り、幾何学模様を彫り込むカット加工を施します。カット加工はクリスタルガラスの美しさを際立たせる最も主要な加工技術です。

高い屈折率を活かした当社のカットガラスは、その彫りの深さ、精密さ、デザインの格調高さから国内外で高い評価を受けています。

また、近年、東京スカイツリーや2020年開催予定の東京オリンピック効果もあり、日本の伝統工芸である江戸切子に注目が集まっています。



江戸切子が施されたグラス
(底の部分にも江戸切子が施されている)

当社では江戸切子伝統工芸士の方々の協力を得て、伝統の文様を基本に、新しい江戸切子の組み合わせや構成、意匠を創り出し、現代の江戸切子として発信し続けています。

無色の世界に生命感を引き出す

当社が誇るグラヴィール彫刻技術は、銅ホイールエングレービングと呼ばれる技法で、習得が非常に難しく、グラヴィール彫刻の中でも最高のものと位置づけられています。この技法は、創立者の各務が日本に伝え、現在にまで受け継がれています。

加工方法は、回転軸に取り付けた銅の円盤に油で溶いた細かい金剛砂を付けて、ガラスの表面に描いたデザインを根気よく彫り込んでいくことにより、美しい絵柄が浮かびあがります。



グラヴィール彫刻加工作業の様子（長谷川氏）

入社して52年、当社を代表するグラヴィール工芸作家の松浦は、「グラヴィール彫刻の基本である真円の玉を彫るには、身体に覚え込ませる以外近道はありません。」と技法の難しさを語っています。

また、32年間グラヴィール彫刻に携わる長谷川は、「完成したクリスタルガラスは、無色透明でありながら、内側から光を放ち、圧倒的な存在感と生命感を併せ持っています。」と魅力を語っています。



グラヴィール彫刻が施された花瓶
「チューリップ」（長谷川氏の作品）

今後の事業展開についてお聞かせください。

女性のお客様の心に響く商品を

当社のHPは女性社員の視点を全面に出してリニューアルした結果、アクセス数が4倍になりました。また近年は本社・銀座ショップへ足を運んでいただくお客様の男女比が逆転し、女性のお客様の来店が増加しています。

これらを受けて、当社ではより一層女性のお客様、特に若い女性の方々に焦点を当てていきます。そのために、さらに魅力ある商品展開や入りやすいショップの雰囲気づくり、親しみやすいディスプレイ、さらに会社のロゴや包装紙のデザインに力を入れていきます。

「絶対品質」で圧倒的な差をつける

私が考える会社経営の基本構造は、「安全」「環境」「5S」が全ての基盤にあると考えています。

私は、事業を進める際社員に対して「自分自身



望月社長が考える会社経営の基本構造

に私利私欲がないかを確認してほしい。」と話しています。これを伝えるのは会社のために自分のベストを尽くせば結果として自分に戻ってくると気付いて欲しいからです。

私が社長として赴任した当初、工場は荷物が溢れ、外の樹木は手入れなく放置状態でした。そこで私は、工場の導線確保や徹底した5Sを指導してきました。その結果、職場の雰囲気や社員の意識も変化していきました。

当社は毎月2~3万個を出荷しています。これら商品の確かな品質を維持するため、全数を社員が目視し、最終確認してから出荷しています。

この全数チェックにより、当社のクレームはほとんどなく、この「絶対品質」こそが他社と差別化を図る為のkey pointだと自負しております。

創業時から受継ぐ“もの創りの心”

各務鑛三が説いた「刹那的場当たりの効果を狙う創造を忌み、真に価値のあるものを創造する精神を常に持つ」という“もの創りの心”は、創業以来、当社の理念として受継がれています。

当社は全作業を「見える化」し、生産高を一目で理解できるような体制を構築しました。これは、各社員の目標や個別の生産高の目標を数字で確認することにより、社員のモチベーションを高める効果があります。

これからも全社員がたゆまぬ錬磨によって技能を深め、高い技術と“もの創りの心”を持って、絶えず独創的な商品を創り続けていきます。

最後に地域への想いについてお聞かせください。

「茨城県にカガミクリスタルあり」

当社では15年以上前から工場見学を実施し、県内外の観光客を受け入れています。この取り組みが茨城県から評価され、当社を茨城県の観光名所の1つとして、様々な観光パンフレットに掲載していただいています。

また、地元龍ヶ崎市のふるさと納税のお返しの商品として選定された結果、受注量が増加し、社員一同嬉しい悲鳴を上げております。

私が考える理想の会社像は、「存在感のある会社」です。これからも世界中のお客様に愛され続ける商品を創り続け、「茨城県にカガミクリスタルあり」といわれる会社にして参ります。



望月社長(中央)とデザイン担当の石塚氏(左)、聞き手・藤咲耕一(右端)

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

■文責／筑波総研株式会社 研究員 富山かなえ